

特集：大学説明会

学生による大学説明 —推薦入試について—

斎藤 龍平（筑波大学 生物学類 1年）

大学説明会でプレゼンを発表させていただいて、たくさんの受験生の顔を目の前にして私は緊張とともに少し懐かしくも感じた。去年の今頃は自分も筑波大学を目指して必死に頑張っていたなあ、と一年前の自分を重ね合わせて見ていたのだ。夏から秋にかけてのこの時期は受験生として最も大事だといっても過言ではない。やはりどの瞳も意欲に満ち溢れていた。そんな受験生のために少しでも力になればと思い、ここでは筑波大学の推薦入試について触れようと思う。

推薦入試は2日間に渡って筆記試験と面接が課せられ、1日目が小論文、2日目が面接だ。筆記試験では英語と生物についていくつか問題が出される。英語では英文自体の長さはそれほど長いというわけではなく、さらに英文和訳や指定された意味の語を抜き出す問題などオーソドックスな問題が多めだ。生物では用語の穴埋めや事象の説明といった論述問題のウェイトはやや軽めであり、実験・観察の結果から考察する力を試される論述問題に重点を置いていた。

これらに対して、対策というならばやはり、当たり前なことではあるが「文章を書き慣れること」だろう。論述問題が問題の大半を占めるため、文章を書き慣れていないと満足に得点することも時間内に問題を解ききることも難しい。さらに、字数制限が設けられている場合も多く、いかに簡潔な文章で且つ要点となる用語を押さえられるかが大きなポイントになるだろう。文章を書く前にいくつかキーワードをあげて、その上でそれらを全部含むように文章を書き始めると効果的だろうか。この際に注意したいことは、書き上げた文章を自己添削のみで終わらせないで必ず他人の意見を聞くこと。答案を採点する人間は決して自分ではない。ということは、他人に読ませ、理解してもらうことを意識した文章にしなければならない。もう一つは「わからない問題も少しでもいいから文章を書くこと」だ。

結果的にその答えが的外れであったとしても書き上げた文章自体は自分の意見に他ならないわけで、なぜそう思ったのかについて、採点をする先生が興味を持ち評価をしてくれるかもしれないのだ。それに、途中で解答をあきらめるような消極的な姿勢はたとえ合格できたとしても後々命取りになることは間違いない。最後まで必死に食らいつく姿勢が大事なことも間違いないだろう。さらに、筆記試験に臨むにあたって高校で使用している資料集の隅から隅まで読みふけてみたり、科学誌で生物学の研究などを読んでみたり高校の授業内容を若干超えるくらいの予備知識を予め頭に入れておくといいだろう。きっと試験本番では見慣れない問題が多く出題されることと思うが、その時に面食らうことを防げるかもしれないし、知識が多いことは問題を解くきっかけになることにほかならない。科学誌の記事などは勉強の息抜き程度にさらさらと流し読みする程でもかなりの情報を得られるしおすすだ。

次に二日目の面接について。面接試験は筆記試験終了後に時間等の詳細が発表される。この面接試験で大事にしたいことは「筆記試験とは完全に切り離して考える」こと。たとえ筆記試験の手応えが良からうともそれを翌日に持ち越すのは悪影響だろう。余裕をもって面接に臨めることは良いのだが「筆記が良かったらうから少しぐらいのミスなら平気」なんて考えに至りでもしたら、もちろん緊張しているわけだから決してミスが多少で済むはずもなく、大変な命取りだ。しかし逆に言えば筆記試験を挽回することもできるということだ。そのためにはやはり前日の出来を面接にまで引きずってしまうことは良いことではない。どんよりした気分でも面接員に良い印象は与えられないだろうし、予期せぬ質問に対し言葉も出てこなくなってしまうがちな。そして、実際に面接に挑むにあたって気をつけてもらいたいことは他には「自分が生物学にかけている思いを余すことなくぶつける」こと。大学での最終地点は「勉強」に留まらない。「研究」である。大学で求められるのは授業で習ったことを勉強してテストでいい点数をとることではなく、自分の興味のある対象にのめり込んで研究していくことである。(と個人的に考えている。)そのため、面接では筆記試験で測ることの出来ない「この人はどれだけ主体的に研究に取り組めるのか」などといったことを測る。だから、面接であることを忘れて、自分の好きな生物学についての話を楽しげに面接員相手に繰り広げてその熱意を存分に披露して欲しい。「どの生物が好きです！」でも、「こんな酵素が好きです！」でも構わない。自分が興味を持っているものについて熱弁することこそが夢を叶える近道だろう。次に、将来についてのビジョンをある程度クリアにしておいて欲しい。ここで言う将来についてのビジョンとは、2年次以降の専門コースの選択や、大学を卒業した後に大学院に進学して更に深い研究を続けるか、企業などに就職して社会に貢献するかなど、ということである。それらを大まかでいいので考えておく必要がある。というのも、将来についてのことは面接時によくされる質問の一つで、この質問に対してははっきりと答えられるのは中々好印象だろう。大学に合格することは大きなターニングポイントであれど、決してゴールではないのでその先まで考えている、考えることのできる人間を大学側は求めているように思う。なので、受験期といえども勉強一辺倒ではなくてしっかりと自分に向き合っていて欲しい。

「受験勉強は苦しい、辛い、嫌なものだ」というのが通説かもしれない。しかしその説は正解でないと言い切ろう。私の受験期は自分の頭の悪さに直接向き合うことが出来て、そのために目標に向かって他の全部を投げ出す事が出来たし、その勉強の過程で生物についての様々な知識を得られたことは苦痛を感じるどころかむしろ楽しいことだった。だからこそここまで対策法を述べてきたが、受験勉強を乗り越えるなんて言い方はして欲しくない。受験勉強は来る大学生活のための準備期間なのだからあれこれ

考えながら楽しく過ごして欲しい。受験期にする勉強や対策などを「楽しい」と感じ取って欲しい。最後に、受験生の皆さんの成功を祈って締めくくりとさせていただきます。

Communicated by Takeo Hama, Received September 30, 2013.